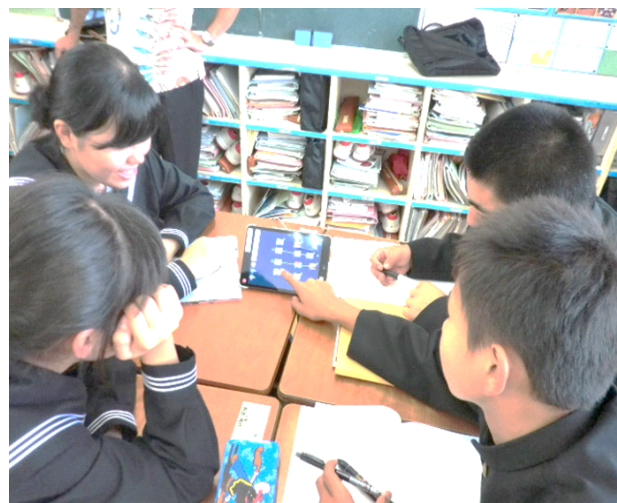


( 中学校 社会科 )

「思考力・判断力・表現力」を育てる歴史学習指導の工夫  
— ロイロノート・マインドマップの効果的な活用を通して —



浦添市立港川中学校

南 正樹

# 目 次

I	テーマ設定理由	45
II	目指す生徒象	46
III	研究の目標	46
IV	研究仮説	46
1	基本仮説	46
2	作業仮説	46
V	研究構想	46
VI	研究内容	47
1	「関心・意欲」を高める，ロイロノートの活用	47
2	「思考力・判断力・表現力」を育てるマインドマップの活用	49
3	既習事項を系統立てて，「書く力」を育む学習指導の工夫	50
VII	授業実践	53
1	単元名	53
2	単元目標	53
3	単元について	53
4	単元の評価規準	54
5	指導と評価の計画	54
6	本時の学習	55
VIII	研究の考察	58
1	作業仮説1の検証	58
2	作業仮説2の検証	60
IX	研究の成果と課題	65
1	成果	65
2	課題	66
	おわりに	66
	主な参考・引用文献	66

「思考力・判断力・表現力」を育てる歴史学習指導の工夫  
ー ロイロノート・マインドマップの効果的な活用を通して ー

浦添市立港川中学校 南 正樹

【要 約】

本研究は、生徒が歴史的事象に対して、学習で得た知識を整理活用し、文章化する過程で歴史的事象を適切に表現するための「思考力・判断力・表現力」の育成を試みたものである。また、マインドマップ・ロイロノートを効果的に活用することで、生徒の課題解決に対する関心・意欲を高め、「思考力・判断力・表現力」の育成を図るものである。

キーワード □歴史 □思考力・判断力・表現力 □ロイロノート □マインドマップ □文章化

I テーマ設定理由

グローバルな世界観や共生社会という価値観が求められる現代において、日本や世界の諸事象に関心をもち、多面的・多角的な視野で、公正に判断するとともに適切に表現する資質と能力が求められている。

近年の子どもたちの生活環境を見ると、多くの情報があふれている。また、その情報を簡単に入手・発信することも可能である。しかし、子どもたちが情報を活用し実生活をよりよいものにしていくための表現力や他者との関わり方に課題を抱えているという現状がある。

このことは学校生活における子ども間の関係性や教師と子どもとの関係性において、意思の疎通や課題解決の方法などで課題として感じるものが少なくはない。これらの課題を子ども自身で克服する力の育成を図るには、授業やその他の教育活動を通して実践を積み重ねて行く必要がある。

そこで本研究では、それらの課題を克服する力の育成のため、社会科の学習を通して子どもたちの「思考力・判断力・表現力」の育成を図る研究を推進していきたいと考えた。

社会科学学習指導要領では、「言語活動の充実」「社会的事象の特色や事象間の関連の説明」「社会的な見方や考え方を養う力の育成が必要であると謳われている。そのことを歴史的分野の学習では、学習した知識を活用し、その時代を大観し表現する活動や、歴史的事象について「考察・判断」し、「その結果を自分の言葉で表現できる力の育成が必要」と記述されている。

本年度9月に本校2学年を対象に、「思考・判断・表現」に関するアンケートを実施した。

「書く学習は好きですか」の質問では、「好き」「やや好き」と答えたのは約57%、「自分の考えをまとめることができますか」の質問では、「あまりできない・できない」で約49%となった。また、「自分の考えを発表することができますか」の質問では、「できる・ややできる」を合わせて約39%である。

これらのアンケートの結果から、生徒は「書く」という学習は好きであるが、自分で「まとめる」「発表する」という学習の場面で、意識が弱いという現状が把握できた。また、「ICT 機器を使っでの発表に興味がありますか」の質問では、「とてもある・少しある」と答えた生徒の割合が約70%となっている。

このような結果から、「関心・意欲」の喚起にICTの活用が有効であると考えられることや、「教師がコンピュータや情報通信ネットワークなどを適切に活用すること」も学習指導要領総則に記述されていることなどから、ICT機器の効果的な活用を試みたいと考える。

これまでの授業を振り返ると、生徒にとって社会科の授業は「聞く」「写す」を繰り返す学習活動であるように思える。その学習活動や内容を見直し、生徒が思考し、適切な表現でまとめる、「課題解決」を有する学習活動が「思考力・判断力・表現力」の育成を図るために必要であると考えられる。

さらに、生徒が社会科に対する関心・意欲を高め、多面的・多角的な広い視野をもち、学習によって得た知識を活用する能力、情報を取捨選択す

る能力や発信力の育成のため、ICT を効果的に活用する学習展開が必要である。本研究では、学習で得た知識を活用し、歴史的事象を文章化する学習を通して「思考力・判断力・表現力」の育成を図りたいと考え、本テーマを設定した。

## II 目指す子ども像

社会科に関心を持ち、学習内容や既存の知識を整理し、適切な語句を用いて文章でまとめることができる生徒。

## III 研究の目標

学習課題に対して、生徒が既習事項を整理し、文章でまとめる過程で「思考力・判断力・表現力」を育成する。

## V 研究構想図



## 1 基本仮説

ロイロノートの活用で、生徒の学習課題に対する関心・意欲を高め、基礎的・基本的な知識の定着を図り、マインドマップによる知識の整理と文章化によるまとめの過程で、「思考力・判断力・表現力」が育つであろう。

## 2 作業仮説

(1) 学習課題や学習段階に応じたロイロノートの活用で、生徒の関心・意欲が高まり、基礎的・基本的な知識の習得が図られるであろう。

(2) マインドマップによる知識のイメージ化で、既習事項の整理を行い、まとめを文章化する過程で「思考力・判断力・表現力」の育成が図られるであろう。

## VI 研究内容

### 1 「関心・意欲」を高める，ロイロノートの活用

#### (1) ICT活用における効果

メディア教育開発センターの調査によると、いずれの校種・教科でも、ICTを使わない授業に対して、ICTを活用した授業を受けた児童生徒が客観テストにおいて上回り、特に「知識・理解」や「技能」の観点において顕著である結果が出ている。

稲垣忠(2014)は、近年、学校現場へのデジタル機器・教材の導入が広まりつつあるなかで、これらのICT(情報コミュニケーション技術)は、教師の「もっとここを大きく見せたい」「映像でイメージを広げさせたい」「この時間を短縮できれば、じっくり話し合わせることができる」といった願いのいくつかを実現してくれる。生徒にとっても、「先生の説明がわかりやすい」「映像で興味が高まった」「興味をもったことを調べられる」「自分の考えを伝える際に便利」といった利点がある」と述べている。

このような調査結果は、本研究のテーマである「思考力・判断力・表現力」の育成に必要な、「基礎的・基本的な知識の習得」をささえる根拠として捉え、「関心・意欲」を高める効果的な手段として考えることができる。

しかし、文部科学省では教育の情報化に関して表1のように謳われている。

表1 教育の情報化に関する手引(抜粋)

「ICTそのものが児童生徒の学力を向させるものではなく、ICT活用が教師の指導力に組み込まれることによって児童生徒の学力向上につながるといえる。

ここで留意しておかなければならないのは、ICTそのものが「思考力・判断力・表現力」を伸ばすものではなく、「思考力・判断力・表現力」を伸ばすことを意図した授業展開と学習指導が求められる。

ICTは学習活動の円滑化を図り、効果的に学習内容を習得するための、一つのツールとして捉えることが適切な活用であると考えられる。

#### (2) ICT活用のポイント

近年、ICT機器の整備にともない、子どもたちの学習ツールとしてタブレット端末の導入が全国的に進んでいる。タブレット端末は従来のキーボード入力やマウス操作を中心としたパソコンに比べて操作性に優れているため、子どもたちに身近な学習ツールとなっている。

総務省が進めている「フューチャースクール推進事業」に文部科学省が連携して進めてきた「学びのイノベーション事業」による取り組みによって、電子黒板やタブレット端末を活用する学習効果が徐々に明らかになってきている。

このことは、本研究テーマである「思考力・判断力・表現力」の育成を図るために必要な「基礎的・基本的な知識の習得」の一つの手立てとして捉え、歴史学習におけるICT活用の検証を試みる。

また、「思考力・判断力・表現力」の育成のためには、「基礎的・基本的な知識の習得」や知識・技能を活用して生徒自身が課題解決を図る授業、またその両方を生徒が根拠をもって関連づけることができる授業の展開が必要であると考える(図1)。

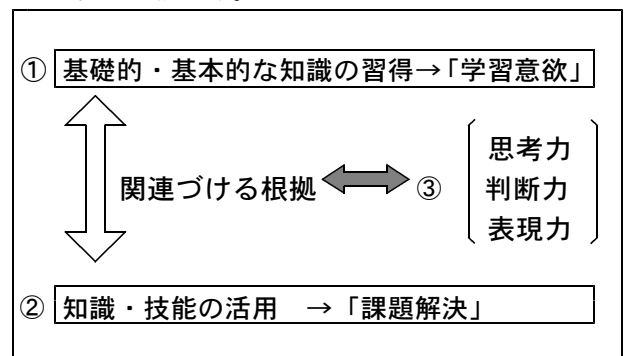


図1 「思考力・判断力・表現力」育成の相関図

#### (3) ロイロノートの活用

タブレット端末で活用するアプリの一つにロイロノートがある。このアプリは生徒が、写真・動画・テキスト・手書き、などの画面上のカードを線でつなぐだけで簡単に伝え合い、発表することを支援するソフトである。

生徒が表現した内容を伝え合い、共有する過程を通じて、さまざまな社会的事象を多面的・多角的にとらえ問題解決に繋げる力を養うことが期待される。そこから本研究のテーマである「思考力・判断力・表現力」を育成するための授業支援はもちろん、「基礎的・基本的な知識



の習得」にも最適なツールととらえる。

### ① 教材の配布

教師からクラス全員または、個人へ資料を一斉送信することが可能であり、授業中に必要に応じて資料を配付することができる(図2)。

この機能を活用することで社会科の教科の特性でもある、多くの資料活用が可能となるほか、それらは短時間で、教師から生徒へ提供され、生徒は学習課題に対して関係性が強いと自己判断した資料を選択し、その画像を手元で拡大して確認することが可能であると考ええる。

このような学習活動は、生徒の授業に対する関心・意欲の向上に期待できる教具であると考えられる。



図2 教材の配布

### ② 学び合い

教師の質問に対するクラスの全生徒の回答を一覧で表示することが可能である。また、教師が説明するにあたり、例示したい生徒の回答を選んで、アプリ画面に比較表示することができ、比較する回答の数に応じて自動的に画面を分割するなどの機能がある(図3)。

この機能を他者と自分の考えを比較する場面で活用することで、生徒がいろいろな視点で歴史的な事象をとらえ、思考を促す発展的な学習へのつなぎの学習となることが期待できる。

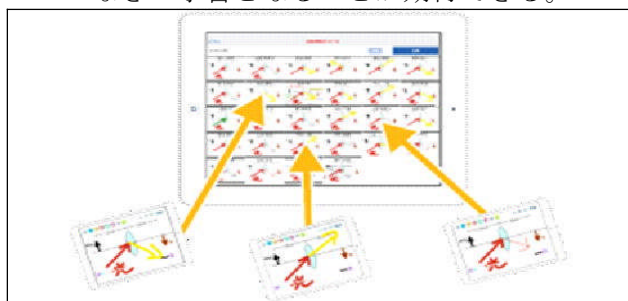


図3 資料の回収による比較画面

### ③ 保管

教師があらかじめ「資料箱」に学習教材や資料をデータ化して保存しておくことで、授業展開において、授業の準備にかかる時間の短縮が

図られ、生徒の活動的な学習時間の確保に効果的であると考えられる。

生徒にとっては前時の学習内容や学習活動のつづきがデータとして簡単に確認することができるため、授業内容を一連の流れで学習することができるのとらえる。

そのほか教師は、生徒の学習の記録の一つとなるノートやワークシート等、生徒の記述の内容をアプリのカメラ機能で撮影し、フォルダで分けて保存することで、評価の際にも有効な機能として考える(図4)。

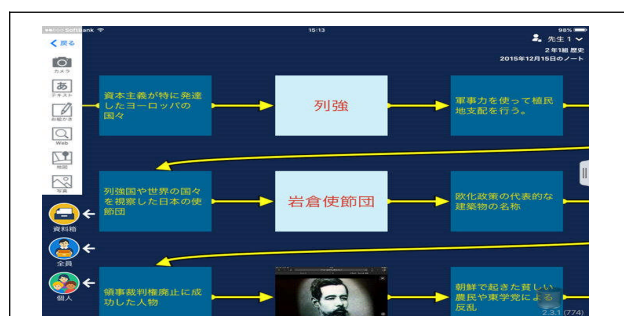


図4 資料の保管

### (4) 「基礎的・基本的な知識の習得」

テキストカードは、ロイロノートの画面上で問題を作成し、そのテキストカードを画面上でつなげることでフラッシュ型学習教材として活用することが可能となるアプリである。

また、そのおもな活用の場面は、授業の導入時の短時間を利用して、前時や小単元で学習した重要語句、または歴史的な事象を一問一答形式の学習の振り返りができる(図5)。



#### 【出題した問題例】

- ・資本主義が特に発達したヨーロッパの国々
- ・軍力を使い、植民地支配を行うこと。
- ・欧化政策の代表的な建築物の名称。

図5 テキストカードの作成

このフラッシュ型学習教材を授業の導入におい

て活用することで、「基礎的・基本的な知識の習得」のための反復学習が短時間で可能となる。このフラッシュ型学習教材を毎時間繰り返し計画的に活用することで、次の表2のような効果があげられる。

表2 ロイロノート活用における効果

1) 授業の準備にかかる時間の短縮
2) 「基礎的・基本的な知識」の復習
3) 機能を生徒が活用することによる「関心・意欲」の向上

2 「思考力・判断力・表現力」を育てるマインドマップの活用

(1) マインドマップを用いた知識の整理

マインドマップは、英国教育者トニーブザンが開発した、思考手段の方法を生徒が授業で生かせるように簡単な作業のみを活用したものである。

① マインドマップの特徴

近田美季子は、「マインドマップは始めから終わりへと順を追って進むのではなく、中心となるコンセプトから放射状に、外側へひろがって細部を取り込んでいく。この方法は多くの点で普通のノートの取り方より優れている」と、表3をあげている。

表3 マインドマップの優れている点

1) 「中心となる概念」が明確である。
2) アイディアの「相対的な重要性」がはっきりしている。
3) 「重要なアイディア」は中心近くにあるのでひと目でわかる。
4) キーワード同士の結びつきが一目瞭然なので関連付けをしやすい。
5) 情報を素早く効果的に思い出すことが可能。
6) 後から書き加えるのが簡単な構造である。
7) ひとつひとつがユニークな作品なので、記憶をよみがえらせやすい。

『マインドマップ超入門』ディスカバートゥエンティワン2015

このマインドマップによる思考の方法を授業で活用するためには、基本的な学習活動となる語句の書き出しから始まる。この語句の書き出しとは、授業のなかで教師から与えられたテーマ（学習課題）に対して生徒が学習により得た知識や、それ以前に生徒が習得してきた既存の知識をノートに重要語句として生徒自身で書き出す学習活

動から、発展させていくものである。

マインドマップそのものの書き方は、脳のさまざまな機能を活かす技術が盛り込まれているため、マインドマップを書くプロセスが「脳トレ」になり、記憶力だけでなく理解力、整理力、発想力、課題解決力などの向上を目的とするプログラムである。

② ミニマインドマップ

本研究では、このマインドマップの思考手段のすべてを活用するのではなく、その初歩の段階にあるミニマインドマップを基本的な手立てとして活用していきたいと考える。

このミニマインドマップとは、マインドマップのように図中の着色は行わないことや、複雑な枝分かれではなく、テーマに直接結びつく語句を書き出すことを特徴としている。その学習作業の手順としては表4で示した。

表4 ミニマインドマップの進め方

1 最初にセントラル・イメージを描く
ミニマインドマップではセントラル・イメージと呼ぶ「テーマやトピックを表すイメージ(絵)」などを最初に中心に描く。
2 連想したキーワードをブランチ上を書く
セントラル・イメージから放射線状にひろがる周囲の枝を、ブランチと呼ぶ。ブランチ上に、セントラル・イメージから連想したキーワードを、連想した順番に書いていく。
3 深く考えずに書く
頭に浮かんだことをすべて書き、最初に浮かんだものから書いていくことが重要。
4 ブランチをさらに増やすことも可能
書き出した言葉から別の言葉が浮かんだらブランチを増やして書き足す。
5 他人と結果を比べてみる
結果を他の人と見比べて、共通した言葉があるか見てみよう。

本研究では、生徒が学習課題を解決する過程で、様々な歴史的事象や関連する語句について生徒自身の言葉を文章化し、説明するためのプログラムである。

また、その文章化に至るまでの段階で、知識の整理を行わせる必要がある。その知識の整理を効果的に行う手立てとしてマインドマップを活用していきたいと考える。

生徒に授業で学習した重要語句や、歴史的事象をノートに数多く書き出させ、その次の段階と

して、書き出した語句や歴史的事象を生徒自身で関連付けを行い、マインドマップを作成させたいと考える。

この系統的に語句を関連付ける活動から「思考・判断」を要する学習活動が始まり、生徒が授業のなかで思考・判断する場面を教師が意図的・計画的に作り出すことで、「思考力・判断力・表現力」が育つであろうと考える。



図6 生徒による「マインドマップ」

図6を描く学習展開では、「思考力・判断力・表現力」を育てるための「整理力・発想力・集中力」の向上を図ることが可能であると考える。

しかし、このマインドマップは自分の思考を整理するうえでの中間生成物であり、描いていったものを見返して、初めて価値があると考えられる。マインドマップをきれいに描くことが目的ではなく、あくまでも思考の痕跡を紙面(ノート)に残すことが重要である。

本研究では、最終的にノートに描いたマインドマップをもとに、その歴史的事象を「思考・判断」することで、生徒が学習により得た知識を適切な語句として文章で「表現」し、ノートに生徒自身の言葉と得た知識で書きまとめることができるであろうと考える。

### 3 既習事項を系統立てて、「書く力」を育む学習指導の工夫

#### (1) 歴史学習における「思考力・判断力・表現力」の育成

中学校学習指導要領解説社会編では、歴史的分野「『内容』ウ」のなかで、「この項目のねらいは、学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえさせることである」と述べている。

また、「時代を大観する活動」とは、学習した内容の比較や関連付け、総合などを通して、政治の展開、産業の発達、社会の様子、文化の特色など他の時代との共通点や相違点に着目しながら、「つまりこの時代は」「この時代を代表するものは」などの各時代の特色を大きくとらえ、言葉や図などで表したり、互いに意見を交換したりする学習活動である。これによって、「思考力・判断力・表現力等を養う」と記述されている。

そこで、本研究では ICT の効果的な活用により、生徒の社会科に対する関心・意欲を高めることで「基礎的・基本的な知識の習得」を図りたいと考える。

そして、思考の手法を用いたマインドマップをノートに作成することで、生徒が既習事項や新しく得た知識を活用する場面を意図的に作り出すことができる。

その後に発展的な学習として、歴史的事象に対する説明の方法として、生徒が自分の言葉で、適切に文章で表現する学習を通して「思考力・判断力・表現力」の育成を図りたいと考える。

つまり本研究においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」と、これらを活用するために必要な「思考力・判断力・表現力」を二本柱として相互に関連させながら生徒の学力の向上のための検証を試みたいと考える。

#### (2) 書く力

本研究における「書く力」とは、授業展開における板書事項を「写す」ということではなく、論理的に書くことである。

実際、生徒は授業展開の学習活動において、「書く」という学習作業に関するアンケートでは「好き」「やや好き」と回答した生徒が、6割近いというアンケート結果が出ている。

このことから「書く」学習に対して生徒は「関心・意欲」を持って取り組んでいると考えることができる。

しかし、「書く」ことが「好き」「やや好き」と答えたほとんどの生徒が論理的に書く、もしくは考えて書くということではなかった。生徒にとって書くという学習活動は、板書事項や教科書の引用であり、きれいに「写す」という内容であることがわかった。



そこで生徒に対して社会科の授業で「書く」という学習活動についてのアンケートを実施した。

「あなたにとって授業の中で、『書く』作業とはどのような学習活動ですか？」の意識調査では、約8割の生徒が、「板書・テレビの画面・教科書等」を見て写すという回答であり、「自分で考えたことを書く」と回答した生徒は2割程度しかいないという結果が出た。

しかしこれらの結果は、授業展開で生徒が考えて書く活動や、文章化する学習活動の場が少ないことに気づかされる。やはり自分の考えや気づきを書くことが学力向上につながる一つの手立てでもあり、これからの社会科の授業にもっとも必要な学習活動であるにとらえ、本研究を推進する。

また、生徒に学習で得た知識を活用させながら、自分の考えを書く場面を、教師が授業展開のなかで意図的に設定することで、その学習過程で「思考・判断・表現」という学習要素を、一連の学習活動で効果的に指導したい。

そこで本研究では、社会科のみならず、各教科を横断的に捉え、言語活動の一環として論理的に書くことの指導を行い「思考力・判断力・表現力」を育てたいと考える。

国語科学習指導要領『B書くこと』(1)目標のなかで、中学校3カ年を通して「目的や意図に応じ」書くというように記述されている。一般的に論理的に書くことは、自分の考えを明確に、また相手にわかりやすく伝えるために、次の4つに注意して書くことであると考えられる。

表5 論理的な文章構成の要素

① 根拠（理由や具体例）を取り入れる。
② 言葉や表現のつながりを意識する。
③ 意図的に文章を組み立てる。
④ 相手が納得できるような道筋を整える。

しかし、これらの4つの項目を社会科の授業に置き換えて考えた場合、国語科による「書く力」を完全に社会科の授業のなかで実践指導していくわけではない。

社会科の授業における「書く」という学習活動は、歴史的事象の説明に必要な、その基本的な要素ととらえる以下の3点、表6を明確に分けることで、社会科学習における文章構成の指導として授業実践する。

表6 文章を構成する要素

① 根拠	・資料から得た情報 ・既習事項
② 理由付け	・自分の解釈の方法 ・関連づけ ・分類
③ 結論	・考察による結果 ・原因と結果の文章化

また、生徒が学習で得た知識を活用して、歴史的事象の説明を文章化するために図7を手立てとして指導する。

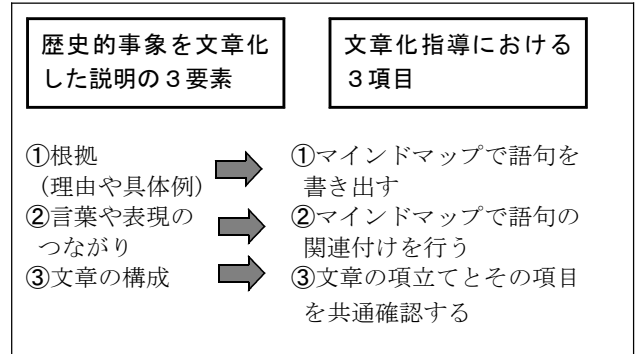


図7 歴史的事象の文章化のための手立て

これらをノート活用の「書く学習」として留意することで、歴史的事象の意味、意義を解釈する学習や事象の特色や事象間の関連を説明するなどの、言語活動にかかわる学習を充実させる手立てとすることで、系統立て「書く力」が生徒に身につき、「思考力・判断力・表現力」の育成につながると考える。

### (3) 文章化による表現

本研究で「書く」とは、生徒が自ら思考した内容を文章化し表現すると捉える。また、「書く力」とは、表6の①・②・③の項目を以下のように系統立てて書くことであると考えた。

①の根拠では、なぜその資料を取捨選択したか、②の理由付けで、どのような考え方や見方をしたのか、そして③の結論によって、自分はどう判断したのか、生徒がこれらを系統立てて文章構成を図り、書いて文章化して表現できることを「書く力」と定義し、文章化を図る過程で「思考力・判断力・表現力」を育成するための授業による検証を試みる。

本研究では、生徒の社会科に対する「関心・意欲」をICT機器を活用して高めることで、基礎的・基本的な学習内容の定着を図る研究とする。

また、生徒が歴史学習を行うなかで、その

歴史的な事象の時代背景や、現代との比較をする学習活動を通して、生徒自身による考えや、生徒個人やグループなどのさまざまな判断、根拠のある歴史的な事象との関連付けや、さらに、学習で得た知識を適切に活用する場面を、授業のなかで意図的に作り出すことをねらいとする。

このような学習のまとめとして、歴史的な事象

の概要や歴史的意味・意義を生徒自身で適切な語句を用いてノートにまとめて書き、文章化された表現活動を通して、生徒の「思考力・判断力・表現力」の育成を図る研究とする。

また、この研究の推進していくため、単元計画を作成し、手立ての活用場面として、表7に示した。

表7 ロイロノート・マインドマップの活用

	単元名	学習内容	活用と授業形態
1	『一等国をめざして』 【ねらい】 ・帝国主義がどのような考え方が列強の植民地政策から理解する、また、条約改正に向けてどのような取り組みがあったのかを確認する。	①帝国主義（イギリス対ロシア） ・列強について具体的な国をあげてその歴史を確認する。 ②条約改正への努力 ・不平等な条約について再確認を行う。 ③朝鮮をめぐる東アジアの情勢	☆ フラッシュ型教材 【導・○】 ★ テーマ「帝国主義」 【展・※】 ☆ 共有と再思考 【展・○・※】  ・フラッシュ型教材を活用し、前時までの語句の確認に本時からの学習の語句を入れる。「帝国主義」については、関連事象や語句をイメージマップを活用し定着を図る。
2	『朝鮮支配と日清戦争』 【ねらい】 ・日本と清が戦争に至るまでの経緯と、三国干渉の内容を理解する。	①日清戦争 ・甲午農民戦争の原因から日清戦争に至る経緯を一連の流れでとらえる。 ②三国干渉と列強の清への進出 ・三国干渉における各国の狙いを推測する。	☆ フラッシュ型教材 【導・○】 ☆ 資料提示 【展・○】 ☆ テキストカード 【展・△】  ・ロイロノートを活用し、風刺画と語句・地図の関連付けをグループで行わせることでコミュニケーションをとりながら日清戦争の流れをとらえさせる。
3	『世界が目にした日露戦争』 【ねらい】 ・日本とロシアが戦争に至る経緯とその結果が及ぼした世界への影響をとらえる。	①義和団の抵抗 ②日露戦争 ・日英同盟におけるイギリスのアジアに対する戦略を理解する。 ③条約の改正 ・日露戦争の結果がなぜこれまでの不平等な条約の改正へと向かったかを考える。	☆ フラッシュ型教材 【導・○】 ☆ 資料提示 【展・○】 ☆ テキストカード 【展・△】 ★ テーマ「条約改正」 【展・△】 ☆ 共有と再思考 【展・○・※】  ・ロイロノートを活用し、日清・日露の流れを再確認する。 ・マインドマップにより、条約改正に至る経緯を文章化させる。
4	『ぬりかえられたアジアの地図』 【ねらい】 ・日清・日露戦争の後、朝鮮・中国への政策の意図を知る。	①日本の植民地支配 ②韓国併合 ③朝鮮・台湾・満州での政策	☆ フラッシュ型教材 【導・○】 ☆ テキストカード 【展・△】 ☆ テキストカード 【ま・△】
5	『第4章 まとめ』 【ねらい】 ・日本の帝国主義と目的について説明できる。	①一等国とは？ ・日本が目指した一等国とはどのような国で、その目的が何かまた結果はどのようなになったかを文章化して説明する。	☆ フラッシュ型教材 【導・○】 ★ テーマ「一等国」 【展・△】 ☆ 共有と再思考 【展・△・※】  ・4章のまとめとしてフラッシュで復習を行う。 ・一等国をテーマにマインドマップを作成、列強の国々の植民地政策に注目させる。 ・一等国を目指した目的・背景・根拠・結果などを文章化してノートにまとめる。

表中の表記

【活用の場面】	： 導入（導）	展開（展）	まとめ（ま）
【手立て】	： ロイロノート活用（☆）		マインドマップ活用（★）
【学習形態】	： 一斉授業（○）	グループ学習（△）	個別学習（※）

## Ⅶ 授業実践

### 第2学年 社会科学習指導案

平成27年12月22日5校時

港川中学校2年1組36名

指導者 南 正樹

【年間指導計画 (2)学年 (12)月計画】

#### 1 単元名 「帝国主義と日本」 ～ 日本がめざした一等国 ～

#### 2 単元の目標

この単元では、ヨーロッパの列強国の植民地支配を背景とした帝国主義がどのようなものかを理解しながら、朝鮮をめぐる日本と清の関係とロシアのアジア進出に興味をもたせ、日清戦争に至る経緯を日本・清・朝鮮それぞれの立場で日清戦争の結果について説明できること。また、日露戦争の経緯とその結果や、英や米の動きに関心をもちながら、日本国内の国民の主張とその根拠を資料から読み取り自分の考えをもち説明させることや、日清戦争・日露戦争の勝利を世界はどのように評価したのか、またその後、朝鮮や中国ではどのような動きがあったのか理解し、自分の考えとして日本の帝国主義をまとめさせることをねらいとしている。

#### 3 単元について

##### (1) 教材観

本単元は学習指導要領の歴史的分野、2内容の(5)近世の日本と世界、ウ、について理解し、「日清・日露戦争」については、このころの大陸との関係に着目させること。「条約改正」については、欧米諸国との対等の外交関係を樹立するための人々の努力に気づかせるようにすることなど、その歴史上の意義や現代へのつながりに気づかせるように指導できる単元であると捉える。本単元「帝国主義と日本」～ 日本がめざした一等国 ～では、ヨーロッパの列強の帝国主義による植民地支配の流れを理解し、当時の日本がめざしたものがどのようなものか「日清・日露戦争」の結果を通して、日本の世界的な立場の変容、また諸外国の日本に対する対応の変化を「条約改正」によって確認することができる。

##### (2) 生徒観

本単元では比較的近い過去の歴史として、また日本が経験してきた戦争の歴史として生徒の単元に関する関心・意欲は高く、歴史的事象を知識として習得しようとする学習意欲を積極的な発言などから確認することができる。しかし、教師の発問に対する生徒の学習活動は自分の意見ではなく、教科書やその他の資料からの答え探しが多く、学んだ知識を自分の思考により活用する場面はあまり見られないのが現状である。

また、発言は積極的な学習姿勢を見せるが、自分の意見や考えを文章化する学習になるとまとめることができずに学習の流れが止まり、集中力を欠いてしまう生徒が少なくない。発言の多くは一部の学力の高い生徒が中心となりがちで、他の生徒はその様子をうかがいながら授業を受けている。

全体的に自分の習得した知識を活用するという学習が定着されていないため、教科書やその他の資料をもとに答えを探す傾向が強く、自分の考えとしてまとめる作業を苦手とする生徒が多い。

##### (3) 指導観

本単元では、幕末に諸外国と結んだ不平等な条約の改正をめざした日本がどのような国づくりを行ったか、中国や朝鮮またロシア、欧米の列強国との関係を踏まえてその事象に対する知識の習得を目的としている。

そのなかで「日清・日露戦争」に至る日本の諸外国との関係や二つの戦争後の日本の世界的な立場の変容を知識として定着させたい。また、なぜ「条約改正」が必要であり、その手段としてどのような方法を日本がとったのか、学習で得た知識や資料をもとに根拠立てて説明、文章化できるよ

うに指導していくなかで生徒の思考力・判断力・表現力の育成を図りたい。その手立てとして、知識の習得のためにICTの計画的な活用や、思考・判断・表現の場面として、知識を活用させるまとめの学習では、ノートに文章化するためのマインドマップの活用を計画的に行いたいと考える。

#### 4 単元の評価規準

社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
歴史的事象に対する関心を高め、それを意欲的に追究し、広い視野に立って我が国の文化と伝統について考え国民としての自覚をもとうとする。	歴史的事象から課題を見だし、我が国の歴史の大きな流れと各時代の特色などを多面的・多角的に考察し、公正に判断する。	年表や歴史地図、映像などの歴史に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して活用するとともに、追究し考察した過程や結果を年表や報告書などにまとめたり発表や討論などを行う。	我が国の歴史の大きな流れと各時代の特色などを我が国の歴史と関連のある世界の歴史を背景に理解し、その知識を身につけている。
日清・日露戦争の背景と内外に与えた影響について関心を高め、意欲的に追究している。	日清・日露戦争の背景と内外への影響について考察し、適切に表現している。	風刺画やその他の資料を手がかりに、日清・日露戦争の意味を読み取っている。	帝国主義の動向、日清・日露戦争と条約改正、韓国併合について理解している。

#### 5 指導と評価の計画（5時間）

	ねらい	学習活動	手立て	評価規準と評価方法
1	『一等国をめざして』 帝国主義とはどのような考えか理解し、日本が条約改正に向けてどのような取り組みをしたか、理解する。	① フラッシュ教材による重要語句の確認 ② 列強による植民地支配の様子を確認する。 ③ 『帝国主義』とは、どのような考えか、列強の具体的な発展の様子から学ぶ。 ④ マインドマップの作成。	☆ロイロノート ☆ ICT 機器による植民地支配の様子を共通確認する。 ☆ 『帝国主義』をテーマにマインドマップを作成	◎【関心・意欲】 ロシアとイギリスの動きに関連させながら、帝国主義がどのようなものか説明している。(マインドマップ・ノート) ○【知識・理解】 日本が列強の国々と結んだ不平等条約の内容を理解している。
2	日本と清が戦争に至るまでにどのような経緯があったのか、またその結果はどうだったのかを理解する。	① フラッシュ教材で重要語句の確認 ② 日清戦争の経緯と結果について学ぶ。 ③ 三国干渉について「風刺	☆ロイロノート ☆ロイロノートを活用し、資料と重要語句の関連付けを行わせ	◎【知識・理解】 朝鮮をめぐる日本と清の関係とロシアのアジア進出に興味をもちながら、日清戦争に至る経緯と結果について資料と関連付けて ICT を活

		画」で関係性を理解する。	る。	用し学んでいる。(iPad・発)
3	日本とロシアが戦争に至るまでにどのような経緯があったのか、また、その結果はどうだったのかを理解する。	① フラッシュ教材で重要語句の確認 ② 義和団事件の概要を学ぶ。 ③ 日露戦争の経緯と結果について学ぶ。 ④ 日清・日露戦争までの振り返りとしてマインドマップを作成し、条約改正について文章化して説明する。	☆ロイロノート ☆ロイロノートを活用し、資料と重要語句の関連付けを行わせる。 ☆マインドマップのテーマ画を配布し、ノートの中央に貼り付けるように指示。	○【思考・判断】 日清・日露戦争を一連のながれで理解し、条約改正について自分の考えで説明している。 ◎【技能】 資料と歴史的事象を関連付けて、並び替えや、カードを繋げることができる。(ロイロノート画面)
4	日清・日露戦争の勝利を世界はどのように評価したか、またその後、朝鮮や中国ではどのような動きがあったのかを理解する。	① フラッシュ教材で語句の確認 ② iPad を活用して、資料と重要語句との関連付けを行う。	☆ロイロノート ☆ロイロノートを活用し、資料と重要語句の関連付けを行わせる。	○【知識・理解】 韓国併合・辛亥革命と関連付けて日清・日露戦争後の朝鮮や中国の動きがわかる。
5 本時	第4章のまとめ 日本の帝国主義についてその目的と結果をまとめることができる。	① フラッシュ教材で語句の確認 ② iPad を活用して、資料と重要語句との関連付けを行う。 ③ マインドマップの作成。 ④ 一等国について文章化して説明。	☆ロイロノートで資料と語句の関連付けを行わせる。	◎【思考・判断・表現】 条約改正を目標に一等国をめざした日本の明治時代の流れを日清・日露戦争等を通して説明し文章化している。(ノート)

## 6 本時の学習 【5 / 5時間】

### (1) 目標

- ① 単元を振り返り、学習した知識をノートにマインドマップとして整理することができる。
- ② 学習で得た知識を活用し、「日本がめざした一等国」について、系統立てた文章構成を図り、文章化してまとめることができる。

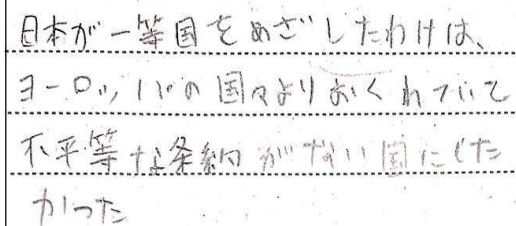

### (2) 本時の授業の工夫

- ① 第4章のまとめとして、重要語句の確認を短時間で行うために、導入場面で ICT を活用しフラッシュ型教材の活用を試みる。
- ② 展開序盤では、知識の整理を効果的に行うために、ロイロノートによる資料提示を行う。
- ③ 展開中盤では、マインドマップの作成による知識の整理をノートで行わせる。
- ④ iPad の写真機能を使い生徒の思考過程を画面に映し出し、思考の可視化を図り、再思考を促す。



(3) 展 開

	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	評 価 項 目 (方 法)
導 入 (7) 分	<p>1 本時のねらいの確認</p> <p>(1) 第4章、重要語句の確認を行う。</p> <p>(2) 出題以外の語句を発表する。</p>	<p>文章によるまとめを行うことを周知させる。 ☆ テーマ「日本がめざした一等国」とはどのようなことだったか、文章化を図らせる。 フラッシュ型教材を活用（ロイロノート）</p> 	
	<p>2 iPadを活用した資料の整理を行う。</p> <p>iPad画面上にある資料カードの関連性を考え、つなげる 学習活動をグループで行う。</p> 	<p>iPad画面上での作業であることを伝える。</p> <p>ロイロノートの資料配付機能を活用し学習課題に対する関心・意欲を高める。 一人の生徒だけで操作することがないように全体に促し、各グループを机間指導する。</p> <p>「一等国」をテーマに描かせる。 ※マインドマップのテーマ図をノート中心に貼り付けさせる。</p> <p>図の左右を国外での出来事や国内の出来事と区別させることで、マインドマップ作成の手立てを行う。</p>	
展 開	<p>3 マインドマップ利用による知識の整理</p> <p>(1) マインドマップの作成を行うことで、知識の整理を行う。</p> 	<p>テレビ画面で参考例を見せる。</p> <p>第4章で学んだ知識（語句）を思い出して書くように促し、学級全体でいくつかのキーワードを確認することから始め、個人の学習へと進めさせる。 グループ内でお互いのマインドマップの共有を行わせる。</p> <p>日本がめざした「一等国」の目的はどのようなところにあり、結果はどうであったのかをまとめる。</p> 	
		<p>【マインドマップの活用について】 ※ 板書で文章構成の参考になるように示す。</p>	<p>【思考・判断・表現】</p> 

<p>(38)分</p>	<p>(2) 本時の学習課題に取り組み。</p> <p>①なぜ「一等国」をめざしたのか。</p> <p>②どのような方法をとったのか。</p> <p>③どのようなできごとが起こったのか。</p> <p>④結果として、日本はどのような国となっていたのか。</p> <p>(3) 比較による再思考</p> <p>自分のノートをiPadで撮影し、資料として教師のiPadへ送信する。指導に効果的と思われる生徒数名のノートを画面で比較することで思考を深め、再度、自分のノートのまとめを行う。</p>	<p>○目的</p> <p>○方法</p> <p>○関連する出来事</p> <p>○結果</p> <p>※ <u>ロイロノートの比較機能を活用し、生徒の思考段階のまとめをテレビ画面に映し出し、可視化した状態で再思考を促す。</u></p> <p>生徒のiPadの画面はロック状態にして、テレビ画面に集中させる。</p>  <p>※まとめたノートは撮影し、教師へ送信して終わる。</p>	<p>マインドマップをもとに系統立て文章構成ができる。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p><b>評価B</b></p> <p>①目的、②方法 ④結果について学習した語句を使い説明できている。</p> <p><b>評価A</b></p> <p>①②④という文章構成に③の中で世界から見た日本の変容やアジアでの日本の存在について述べている。</p> <p><b>評価C</b>への手立</p> <p>①～④を具体的な事象名をあげて文章構成を促す。</p>
<p>まとめ</p> <p>(5)分</p>	<p>4 記録と保存</p> <p>(1) 自分のノートを撮影しカードとして残す。</p> <p>(2) グループの全員のカードをつなぎ、教師へ送る。</p>	<p>送信したグループは、教師がそのグループ名を読み上げて確認を行う。</p> 	

(4) 板書計画

テーマ 第4章 『帝国主義と日本』まとめ

ねらい：日本がめざした「一等国」とはどのようなものであったか、文章でまとめる。

【これまでに学習した内容】

- ・ 帝国主義・・・ヨーロッパ列強
- ・ 日清戦争・・・三国干渉、下関条約
- ・ 日露戦争・・・ポーツマス条約
- ・ 韓国併合
- ・ 中華民国の成立

- 『マインドマップ』を活用しての文章化について
- 目的・・・なぜ
  - 方法・・・どのようにして
  - 関連・・・何が(どのような事)起きた
  - 結果・・・どうなった

## Ⅷ 研究の考察

### 1 作業仮説(1)の検証

学習課題や学習段階に応じたロイロノートの活用で、生徒の関心・意欲が高まり、基礎的・基本的な知識の習得が図られるだろう。

#### (1) フラッシュ型学習教材について

##### ① 手立て

ロイロノートで作成した、フラッシュ型教材の活用は、授業の導入場面で、前時や小単元を対象とし、重要語句、または歴史的事象に関する問題を一問一答形式で出題し、解答させることで知識の定着を図る学習とした。

##### ② 結果

フラッシュ型教材を毎時間の導入時に活用したことで、問題に対する関心・意欲が高まった。また、教師が解答する生徒を指名したり、座席列の順番で割り当てる工夫をすることで、全員に答えさせることができた(図8)(図9)。

このような学習形態により、問題に対する関心・意欲が高まり、基礎的・基本的な知識の定着を図る学習活動となった(図9)。



図8 フラッシュ教材活用の様子

【フラッシュ教材画面と問題】

資本主義が特に発達したヨーロッパの国々 → 列強 → 軍事力を使って植民地支配を行う。

列強国や世界の国々を従属させた日本の使節団 → 岩倉使節団 → 欧化政策の代表的な建築物の名称。

領事裁判権廃止に成功した人物 → 岩倉 23(172)

- 資本主義の発達したヨーロッパの国々を何と呼んでいたか？
- 軍事力を使い植民地支配を行う政策。
- 日本の欧化政策の代表的な建築物の名称は？

図9 フラッシュ型教材

フラッシュ型教材の効用をはかるため、小テスト(20問)を小単元終了後に実施した。小テストは約2週間の期間を空け、20問の問題をフラッシュ型教材を活用した問題14問と、フラッシュ型教材を活用していない問題6問に分けて、小テストを実施した(図10)。

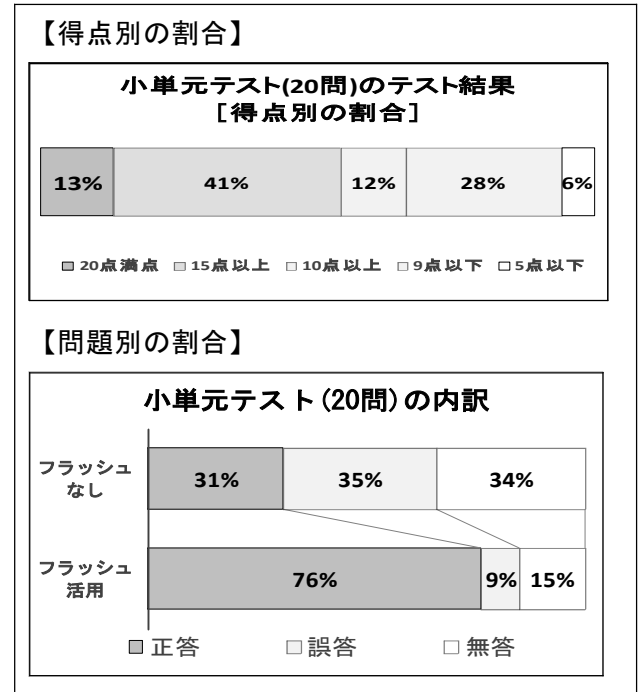


図10 小テストの分析結果

小テスト分析結果図10,【問題別の割合】では、フラッシュ型教材を活用していた問題14問における正答率は、76%という結果がであった。

また、フラッシュ型教材で確認していないが、教科書では太字などで記された重要語句6問に関しては正答率が約31%という結果が出た。

また、小単元における重要語句の小テストを実施後、フラッシュ型教材についての生徒アンケートを行ったところ次のような結果が出ている(図11)。

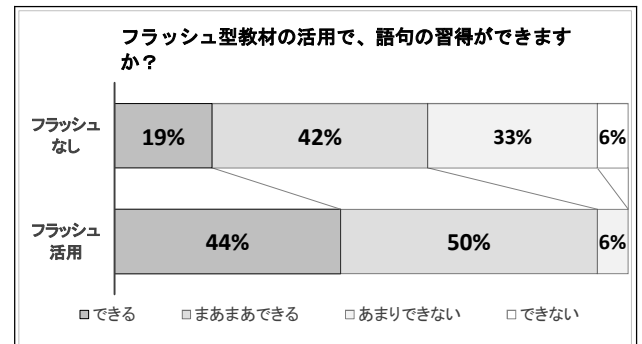


図11 フラッシュ型学習教材に関する意識調査

フラッシュ型学習教材に関する意識調査の結果から、フラッシュ型学習教材を活用した重要語句



句の習得に関して、約9割の生徒が効果的であるととらえていることがわかる。

重要語句や歴史的事象に関する名称を、繰り返し学習することが知識の習得に効果的であることや、学習を繰り返すことの効果を生徒自身が感じていることがわかった。また、生徒によっては、図12の感想のように充実感や達成感を感じた生徒もいた。

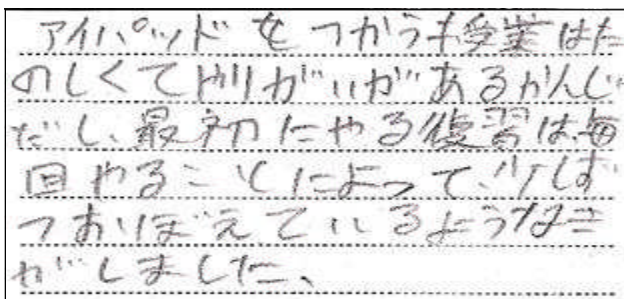


図12 フラッシュ型教材学習における感想

### ③ 考察

フラッシュ型学習教材を授業で活用することで、生徒の学習課題に対する関心・意欲を高めることができた。このことは、図11の意識調査で9割の生徒がフラッシュ型教材を効果的であると答えていることや、図12の感想のように授業に対しての達成感や充実感をもった生徒もいた。

表8 フラッシュ型学習教材の感想

<p>【その他の生徒の感想】</p> <p>【関心・意欲を高めた感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○簡単に重要語句の確認ができるのでよかった。</li> <li>○漢字もしっかり確認できて良かった。</li> <li>○みんなでやるから楽しい。</li> </ul> <p>【授業内容へのつながりとなった感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○毎時間やることで毎回確認できて、単語を知っていることで授業が理解しやすい。</li> <li>○毎回繰り返しやること重要語句や歴史の流れを覚えられた。</li> </ul> <p>【知識の習得で効果的にとらえる感想】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○意識しなくても覚えていた。</li> <li>○確実に早くなったし、正確になった。</li> <li>○フラッシュはわからなくても、すぐに出てきてあ〜ってなるし、くりかえしやることで覚えることができた。</li> <li>○テストなどでも高い点数をとったり、自分のためになり力になりました。もっと活用したい。</li> </ul>
--

また、表8の感想からは、授業に対する関心・意欲はもちろん、導入時におけるフラッシュ

型学習教材での学習が、その後の授業展開の内容と関連性づけができることなど、歴史学習のいろいろな場面で、フラッシュ型教材が効果的な学習ツールであるととらえることができる。

このような結果から、フラッシュ型教材を活用することで生徒の授業に対する関心・意欲を高め、知識・理解の定着において効果的な学習活動となり知識の習得が図られた。

(2) ロイロノートの機能を、生徒に活用させた資料の整理について

#### ① 手立て

歴史的事象に関する知識の整理を効果的にまた、生徒の活動を中心に行ううえで iPad のアプリ、ロイロノートの活用を手立てとして指導する。

ロイロノートの機能の一つであるテキストカードを使い、歴史的事象に関連する資料を教師から生徒側の iPad へ送信し、生徒は送信されてきた資料と語句の連結作業を、iPad の画面に触れ、個人または、グループで話し合いながら知識の整理を行う学習活動を行わせた。

#### ② 結果

生徒自身が、iPad に触れて操作することで、歴史的事象に関連した資料に対する関心・意欲が高まり、資料と学習課題を関連づけながら知識の習得を図る場面を意図的に作り出すことができた(図13)。

また、提示された資料をグループ全員で交互に操作しながら学習をすすめることで、積極的な意見交換、コミュニケーションを図る場となり、お互いの知識を共有する場とすることができた(図13)。



図13 iPadの操作の様子

### ③ 考察

iPad のアプリ，ロイロノートのテキストカードや写真資料のカードを活用し，知識の整理を行わせる学習活動は，生徒全員が iPad に触れ操作することが可能となった。そこでは，グループでのコミュニケーションを図りながら学習するスタイルが，学習課題に対する興味・関心を高めることにつながった(図13)。

また，生徒が実際に iPad 操作の機会を与えられたことで，歴史の学習に対する関心・意欲が高まり，学習課題に対して生徒個々の知識をグループで共有しながら，主体的に知識の整理を行う学習活動の場面を作り出すことができた。

#### 【生徒の感想 1】

アイロノットを使って、授業して、わかりやすかった所は、自分で考えて、一連の流れをまとめることが出来るという所です。そうしても、だんだんなやってきました。画像なども、大きくして見れるので、わかりやすいです。

#### 【生徒の感想 2】

iPadでの授業は画像が手元にあるから見やすいし理解しやすかったです。画像を自分下っなげたりするので、時代の流れが分かりやすく覚えやすいのでよかったです。

図14 iPad操作による感想

ロイロノートの機能を活用することで資料提示に関するいくつかの課題が克服することができた。これまでは資料を提示する際に生徒の持参している資料集や教科書の挿入資料，または教師が準備した紙面，画像が中心であったが，どれも画像が見にくい，または生徒が実際に何を参考としたいのかがわからないという現状があった。

しかし，iPad の機能を活用することで，生徒は手元で画像を確認できることや，その画像

を生徒自身で選択，または画像を拡大して確認することが可能となった。これらは，生徒の学習課題に対する関心・意欲を高め，学習内容を一連の流れとしてとらえ，習得していく様子が多くの生徒の感想からうかがえた(図14)。

ロイロノートの活用は，フラッシュ型学習教材やテキストカードの機能を活用することで，生徒の学習課題に対する関心・意欲の向上に効果的であったととらえる。

また，このような ICT 機器を生徒に活用させながら，教師の意図する授業の場面で効果的に取り入れることは，基礎的・基本的な知識の習得につながる学習活動になると考える。

### 2 作業仮説(2)の検証

マインドマップによる知識のイメージ化で，既習事項の整理を行い，文章化する過程で「思考力・判断力・表現力」の育成が図られるであろう。

#### (1) マインドマップによる知識のイメージ化について

##### ① 手立て

マインドマップを作成することで，知識のイメージ化を図り，学習した知識の整理を行わせた。

マインドマップの作成は，その後の学習の資料として活用するために，作成手順を共通確認し，テーマとなる絵図の周辺に思い浮かんだ重要語句を書き出すことなどを画面で実演する手立てを講じた(図15)。



図15 マインドマップの説明



② 結果

マインドマップを作成することが、学習した知識の整理となり、授業で得た知識を活用する学習が可能となった。

また、マインドマップのテーマ(学習課題)に対して、計画的に学習活動をすすめることで、生徒が自らの思考をはたかせ、歴史的事象全体をイメージ化しながら確認し、知識の整理を行ったことは、授業に対する満足感や達成感を高揚させたこととらえることができる(図16)。

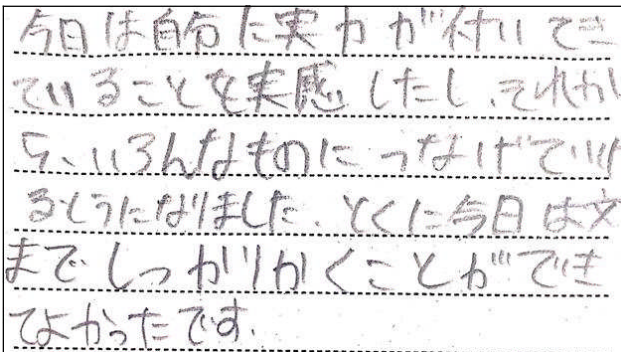


図16 マインドマップの感想

マインドマップの作成は、テーマ(学習課題)となる歴史的事象に対して生徒が自由に思い浮かんだ語句や歴史的事象を書き出し、それらの関連性に注目しながら、生徒が自分の思考によって全体像を系統的にまとめ、マインドマップを作成することができた(図17)(図18)。

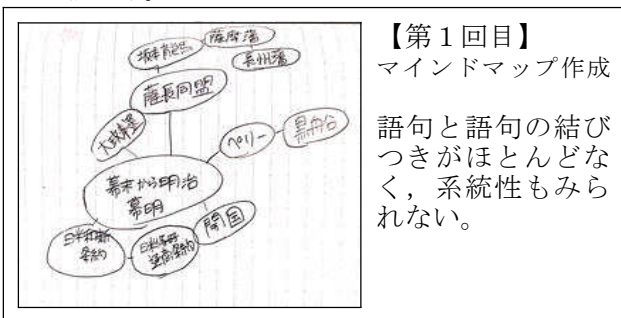


図17 生徒Aの1回目のマインドマップ

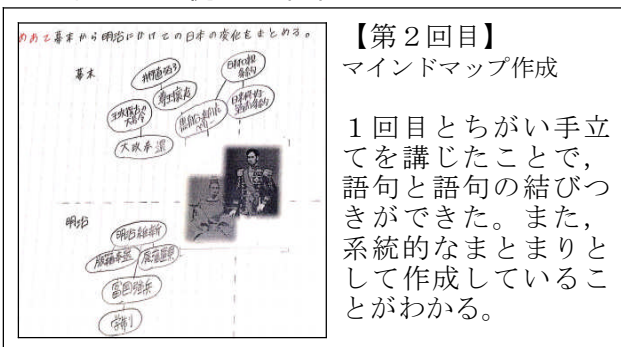


図18 生徒Aの2回目のマインドマップ

また、図17、図18は同じ生徒が作成したマインドマップであり、テーマとなる絵図を教師が準備して、ノートを中心に貼らせることと、左右対称軸を活用する手立てを講じたことで、マインドマップに顕著な変化がみられた。このマインドマップの変容は、その他の生徒からも同様なものがノートからうかがえた(図19)。

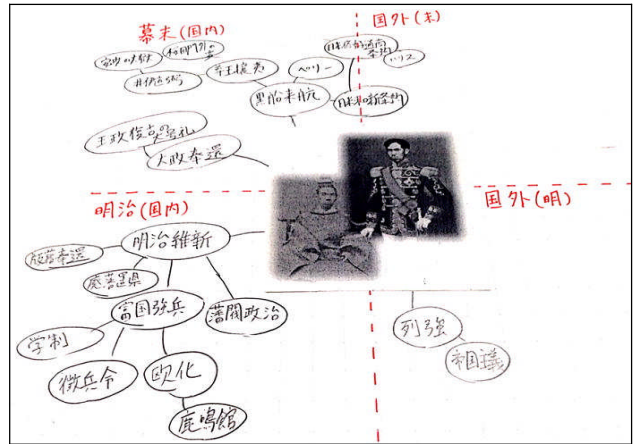


図19 手立てを講じた後のマインドマップ

また、生徒が作成したマインドマップを資料として、歴史的事象を説明する学習にすすむため、マインドマップの活用について生徒の意識調査を行った。その結果、約8割の生徒が活用できるという回答結果が出ている(図20)。

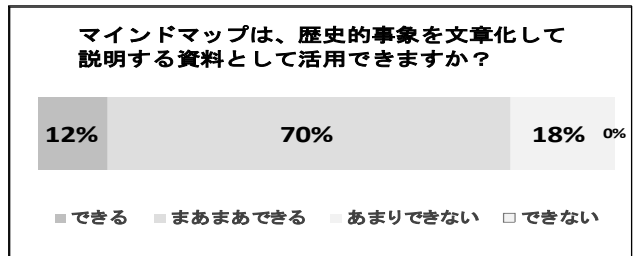


図20 歴史的事象の説明に関する意識調査

③ 考察

マインドマップを活用して、知識のイメージ化を図ることは、生徒が授業により得た基礎的・基本的な学習知識を活用する場面を意図的に作り出すことができた。

このことにより、これまでの教師主導の授業から、生徒の主体的な活動を中心とする学習展開へ改善することができたと考える。

また、生徒が学習で学んだ知識を活用して、マインドマップを作成することで、授業で学んだ知識の習得や授業に対する関心・意欲の向上に効果的であったこととらえる。これらは、マインドマップに記述される重要語句や歴史的事象の数の変容などが、生徒の感想からもうかがう

ことができる。

また、マインドマップ作成における語句や歴史的事象の連結は、生徒の思考と判断による根拠をもった学習活動の記録として、評価することができる（図21）。

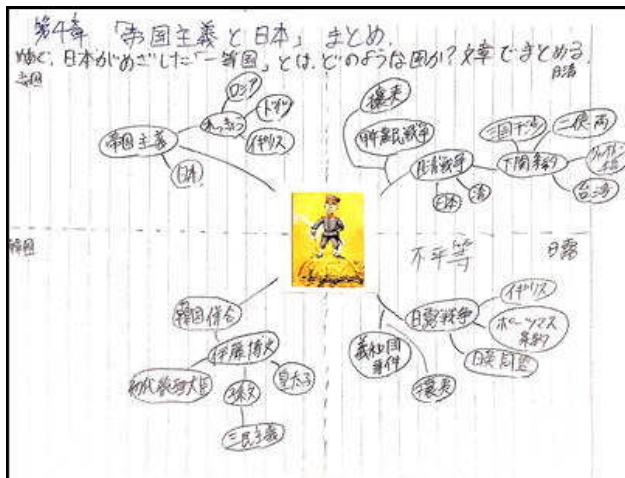


図21 マインドマップ

マインドマップにすると、ノートに  
まとめるよりも、ポイント単語が  
できて、その1條に文章にしよう  
と思うと、その中からえらんで  
まとめるだけだから、やりやすい  
かなーと思った。また、自分がどの單  
語を知ってるかわかるからいい。

図22 マインドマップ活用に関する感想

また、マインドマップを作成する学習活動を通して、生徒は自身の学習段階を確認することが可能となった。そのことは、発展的な学習への意欲の高まりとして、生徒の感想の多くからうかがえた。これは、主体的な学習が行われてたととらえることができる。

(2) 歴史的事象の文章化による説明

① 手立て

生徒自身で作成した、マインドマップによって図式化された重要語句や歴史的事象の全体図を資料として活用させ、テーマ(学習課題)について生徒自身の言葉と、学習で得た知識を用いて文章化してノートにまとめさせた。

また、文章化を図る過程で、項立ての主な項目となる歴史的事象や重要語句の活用を、具体例として板書で示し、説明を加えることで文章構成について共通確認を図った。

② 結果

はじめに、マインドマップを活用せず、テーマ(学習課題)を与え、歴史的事象に関する説明を文章化する授業を行うと表9のような文面がほとんどであった。

表9 生徒による歴史的事象の文章化の例

- テーマ「幕末の日本」
- ①開国して、アメリカと自由な貿易をした。
  - ②幕府は外国をおそれて、不平等な条約を結んだ。
  - ③ペリーが訪れて鎖国をなくして、外国と貿易をした
  - ④日本と貿易したいために、ペリーが来航した。

授業後にノートを提出させ、生徒が文章化した内容を確認したところ、文章としてまとめることができない生徒が、学級のほぼ半数いることがノート提出からわかった。

また、文章化した生徒の文面は表9、箇条書きが多く、断片的な内容であり、授業で学習した重要語句の活用も少なく、まとまりのない文章がほとんどであった。

このような結果を踏まえて、知識の活用を意図としたマインドマップの作成と、相手に伝わる文章を構成するために、文章の項立について授業で具体的な事象や語句を用いて説明を行った。その結果、生徒の文章は表8の文章から図23のような表現へと変容が見られた。

文章化した例 A

テーマ「明治維新による日本の変化」

ペリーの来航により、外国の力の強さを知り、富国強兵を目指した。

文章化した例 B

テーマ「明治維新による日本の変化」

大政奉還により武士の世の中から天皇を中心とする世の中へ変わった。

図23 テーマを文章化した例

図23の二人の生徒の文章では、「何が」、「どうして」、「どうなった」、という文節がはっきした文章となっている。

また、マインドマップに書き出した重要語句や歴史的事象の活用を強調してうながすことで



同じテーマでも図23の説明文 A の生徒は、ペリー来航から富国強兵政策までの日本の歴史の大きな流れのなかで、外国と日本の当時の関係性について、世界的な広い視野で説明しようとしていることが文面から読み取ることができる。

一方図23の説明文 B の生徒は、幕末時における政権交代の様子を、「武士」「天皇」または「大政奉還」というキーワードとなる語句を活用して、文章構成を図っていることがわかる。

このように、マインドマップの作成や、文章で表現するための文章構成における項立ての手立てを用いることは、これまで記述や論述問題に対して、やや消極的であった生徒も、意欲的に学習に取り組む姿勢をみせたことが感想からうかがうことができる(図24)。

**説明文の感想 (女子生徒)**

社会でマインドマップを使うのは初めてだったけど、マインドマップを使うとその後説明する時、やりやすかったです。

**説明文の感想 (男子生徒)**

文章を考える前に、マインドマップを作ったので、前より文章を書きやすかった。次はマインドマップをなくして文章かいてみることにしたい。

図24 マインドマップを活用した説明文の感想

このような歴史的事象を文章化する授業内容やテストは、生徒が苦手とする学習活動であり、アンケートの結果にも出ている。しかし、マインドマップと文章構成における項立てという具体的な手立てを講じたことについて、生徒がどのように感じたか、意識調査を行った(図25)。

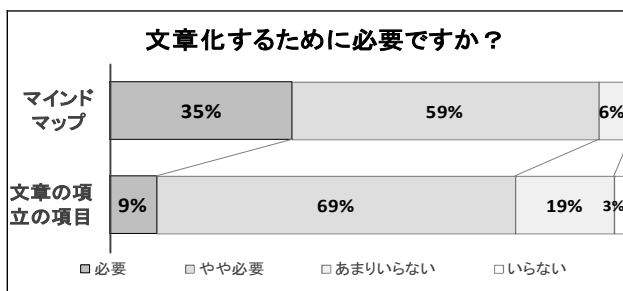


図25 文章構成に関するアンケート結果

アンケートの結果から、文章の項立てについては約8割の生徒が必要・やや必要と回答している。また、マインドマップに関しては9割を超える生徒が、必要・やや必要と回答している(図25)。

項目をはっきりさせることと、マインドマップを資料として活用させることが、文章を構成するうえで効果的であった(図25)。与えられたテーマ(学習課題)を文章化してまとめる過程では、項立てを行わせることが、文章化の手立てとなった。

その結果、学んだ知識を活用して文章化を図る学習は、生徒の思考力・判断力・表現力をはたらかせる学習の場となった。

また、最初に書きまとめた文章に対して、「目的」「方法」「関連」「結果」などの項目を再度検討してまとめるように指示をだし、文章の再構成を図ると図26から図27のような変化として確認することができた。

不平等条約をなくすために列強国においつくために色々な手を使った。

図26 項立てのない文章化

日本はペリー来航したあとに結ばれた不平等条約を改正するために列強国においつこうとして、清やロシアと戦争をして世界の注目を日本におかせ、植民地支配をしたり帝国主義をかため、韓国併合をしたりして列強国となって不平等条約を改正した。

図27 項立ての手立てを講じた後の文章

### ③ 考察

マインドマップを基本的な資料として活用し、テーマ(学習課題)の説明を行うため、歴史的事象や重要語句を用いて文章化を図る授業展開を試みた。その結果、マインドマップに書き出した重要語句や歴史的事象を、生徒は各々の視点で思考・判断することが可能となった。

そこで、歴史的事象や重要語句を取捨選択する学習活動が行われ、生徒独自の文章化による

表現が行われたととらえることができる。

このような学習は、これまでに学習した重要語句や歴史的事象に関する知識の整理として、マインドマップを作成することが、知識を活用する機会になったと考えることができる(図28)。



図28 マインドマップを活用した文章化の様子

また、このような学習活動は、教師主導の授業形態から、生徒が主体的に活動する時間を増やすことで、思考・判断・表現という学習内容に対する関心・意欲を高めることができた。

次に、文章を構成する項立ての手立てを講じたことで思考や判断を要する学習活動となり、生徒による主体的な学習がすすめられ、思考力・判断力の育成を図ることができた。

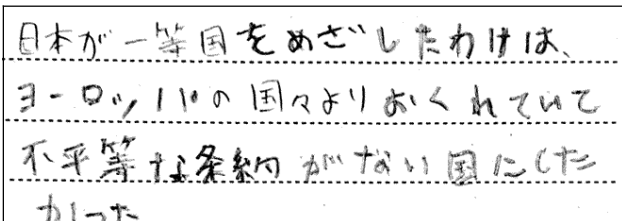


図29 文章化の初期段階

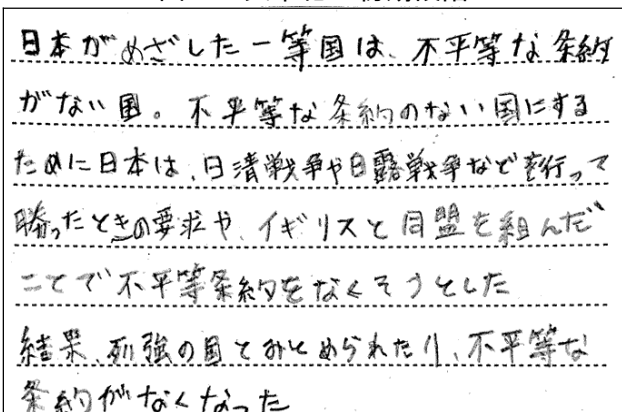


図30 項立てを行った後の文章化

また、図29では、「日本が目指した一等国」をテーマにして、説明を文章化させたところ、テーマに対する目的は書かれているが、その目的を達

成するための方法や、その時代・時期に起こった歴史的な事象に関する出来事が書かれていない。

しかし、図30では、一行目の文章で「目的」が記述され、二行目から三行目にかけてその目的達成に向けた「方法」や「具体的な事象」も記述されている。

この「方法」や「事象に関する内容」は、テーマ(学習課題)に対して適切な内容であり、生徒がこの内容を文面に用いた過程で、思考・判断を要する生徒自身の積極的な学習活動が行われたととらえることができる。

なお、四行目以降では、その結果が述べられており、項立てによる手立てが効果的な学習であったととらえることができる。

また、マインドマップが生徒自作の資料であることが、これまで論述問題に対して苦手意識の強い生徒でも、文章化してノートにまとめることができた。

これは生徒の授業に対する関心・意欲の向上が図られたととらえ、知識の定着にも効果的な学習であると考えられる。

また、文章化を図る際に、項立ての工夫を手立てとしたことで、文面の長さや、内容を再構成している様子は、生徒が「思考・判断」を繰り返しながら、より適切な表現で文章化を試みた生徒の学習の成果といえる。

これらの手立てを講じることで、定期テストにおける思考・判断・表現を要する記述問題の正答率に関して、検証授業前のテストと検証授業後のテスト結果の考察を試みた。

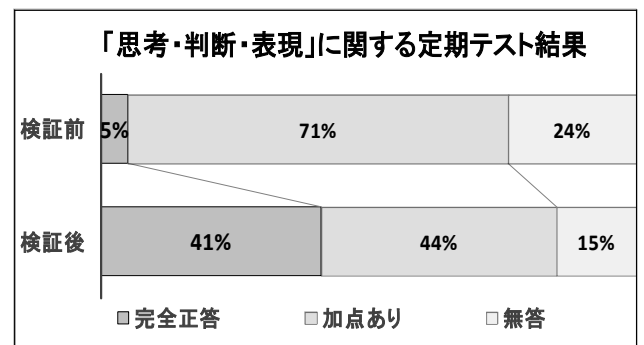


図31 2学期定期テスト結果の比較

テストに関する考察は、思考・判断・表現の観点に対して、文章化して解答する問題に限定して考察を行った。その結果は、手立てを講じる以前のテストに比べ、手立てを講じた後のテストの完全正答率が5%から41%へと正答率の改善が図ら



れた。

また、文章化する解答のため完全な正答には至らないが、部分点がついた「加点あり」では44%となり、「完全正答」「加点あり」を含めると、検証前のテストでは76%、検証後のテストでは85%の生徒が得点することができた。

このテストの比較では無答率も24%から15%へと減少がみられたことから、テスト問題に対する生徒の主体的に学ぶ意欲と、思考・判断の過程を生徒が学習で得た知識を活用し、自分の言葉で表現する学習を通して、思考力・判断力の評価を行うことができた。

### 3 本研究を通して

#### (1) フラッシュ型学習教材の活用について

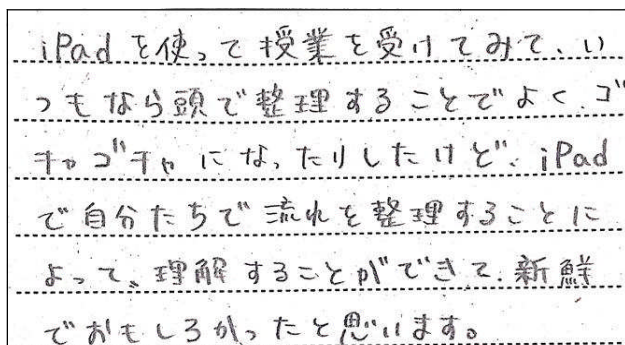
本研究では、ICTの効果的な活用により、学習に対する生徒の関心・意欲を高めることができたが、このフラッシュ型教材は、画面に集中するあまり、積極的な発言が回数を重ねるごとに減ってしまった。

これは、一見集中した学習の雰囲気とすることもできるが、フラッシュ型教材を活用する効果の一つでもある主体的に学び合う学習の雰囲気作りの要素が薄れつつあった。

そこで、教師が解答する生徒を指名することや、座席の列を指定することで、問題に対する緊張感をもちながらも、楽しく主体的に学び合う雰囲気のなかで解答・発言等が多く出せるようになった。

#### (2) ロイロノートの活用について

iPadのアプリ「ロイロノート」を生徒に操作、活用させることで、社会科に対する意識の改善が図られ、生徒の自由な発想やさまざまな視点・視野を育てることに効果的であった(図32)。



iPadを使って授業を受けてみて、いつもはら頭で整理することでよく、ゴッゴッになれたりしたけど、iPadで自分たちで流れも整理することによって、理解することができて新鮮でかもしられたと思います。

図32 iPadを活用した知識の整理に関する感想

#### (3) 項立てを意識した説明文

歴史的事象を文章化して説明するための手立てを講じた結果、生徒の文面が長くなるという傾向がみられた。

これは学習内容に対して生徒自身が「できる」「できそう」などの期待感や充実感をもたらした学習の一つの結果であり、成果として評価することができる。

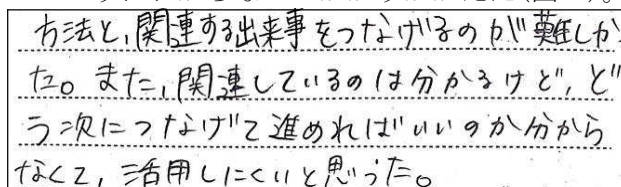
また、文章構成に必要なとらえる4項目についてアンケートを実施した(表10)。

表10 文章構成におけるアンケート結果

文章構成における活用が難しかった項目は？		
項目	項目の内容	割合
目的	「何が」「誰が」「何のため」	25%
方法	「どのような」「どうした」	12%
関連事象	「具体的な事象」	51%
結果	「どうなった」	12%

アンケートの結果から、活用が難しい項目として最も高いのが「関連事象」の項目であった。

また、生徒の感想からは、生徒がどのようにわからないのかがうかがえた(図33)。



方法と、関連する出来事をつなげることが難しいが、た。また、関連しているのは分かるけど、どの次につなげようか進めればいいのか分からなく、活用しにくいと思った。

図33 文章化において難しい項目に関する感想

このような感想は、文章化を図る授業において、生徒の思考力や判断力を高める重要な場面であると考えられることができる。

このような感想は多くの生徒にみられ、さらなる授業改善を図る視点となるため、工夫を検討していきたい内容である。

## IX 研究の成果と課題

### 1 成果

#### (1) フラッシュ型教材の活用と有効性

生徒の社会科の授業に対する関心・意欲を高める教材としてフラッシュ型教材の活用は、これまでのような受け身の学習から、生徒が主体的に学習を行う授業形態とすることができた。

その主な要因は、短時間で学級全体が学



びの雰囲気作をつくることができたことや  
反復学習が毎時間可能となることで、基礎的  
・基本的な知識の定着のための学習プログラ  
ムとして効果的であった。

## (2) iPad を活用した主体的な学習の展開

iPad をグループ(4人)に1台与え、生徒に  
操作させる学習活動を取り入れたことで、生  
徒による活動的な学習展開とすることができ  
た。また、生徒間で学び合う様子も多くみ  
られ、学習に対する主体性が育つ授業とな  
った。

## (3) マインドマップの活用

マインドマップの活用は、知識の整理を可  
視化して行うことができた。また、知識を  
整理する過程で、関連性を考えまとめるこ  
とで、「思考力・判断力」を要する言語活動  
の充実を図ることができた。

## (4) 歴史的事象の文章化による説明

歴史的事象を文章化する学習では、マイ  
ンドマップを資料活用することで、生徒自  
身が思考・判断しながら、生徒自身の言  
葉と学習で得た知識を活用し、全ての生  
徒が文章化することまでできた。

## 2 課題

### (1) フラッシュ型教材に関する達成度の確認

フラッシュ型教材の活用では、生徒各々  
が学習の記録・評価を残す必要があり、今  
後は小テストの計画的実施と、生徒自身  
で記録を残す工夫が必要である。

### (2) ICT 機器の管理

ICT 機器活用では、そのハード面の管  
理であり、保管状況や同一の時間帯に  
他の教室での iPad 使用が重なること  
が予想され、活用

用に関する共通確認が今後必要である。

### (3) 思考・表現をともなう学習

思考した内容を可視化することを目標と  
する文章化は、文字数や活用する歴史的  
事象数など適切な条件設定が必要であり、  
日常の学習のなかでも試みていきたい。

おわりに

社会科の授業に対する生徒の思い込みを  
改善し、学力向上を図るために、今回の  
研究テーマ設定に至りました。このテー  
マの設定には、生徒が自分の可能性を信  
じて学習に取り組む意欲や、粘り強さを  
身につけることの必要性を常に感じてい  
た、教師としての思いからでした。

社会科の授業を通してそれらを実現す  
るには、「できる」という充実感や、自分  
で成し遂げたという「達成感」を実感さ  
せることであると考え、本研究を推進さ  
せていただきました。

今回の研修期間中、ご指導ご助言いた  
だきました仲西起實所長、日高聡係長、  
美差淳司指導主事、検証授業や報告書  
等、教科に関するご指導ご助言をいた  
だいた、當間五弥那覇教育事務所主任  
指導主事、検討会や報告会等でご指導  
ご助言をいただきました浦添市教育委  
員会の先生方へ深く感謝申し上げます。

また、研究所での研修を勧めてくださ  
った港川中学校當間正和校長先生をは  
じめ、検証授業や実態調査等で学校を  
訪れる際に、進捗状況を気にいただき、  
声をかけていただいた金城淳教頭先  
生、港川中学校の先生方、そして半年  
間の研究とともに励んだ研究員のお二  
人の先生方に心より感謝申し上げます。  
ありがとうございました。

### 【主な参考・引用文献】

・ 中学校学習指導要領解説社会編	文部科学省	H20.9(H26.1月一部改訂)
・ 教育の情報化に関する手引	文部科学省 <a href="http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm">www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1259413.htm</a>	
・ 社会科授業づくりトレーニング BOOK	澤井陽介	明治図書 2015
・ 活用型学力を育てる授業づくり	木原俊行	ミネルヴァ書房 2011
・ 市川伸一「教えて考えさせる授業」を創る		図書文化 2014
・ 「マインドマップ超入門」	トニー・ブザン ディスカヴァー・トゥエンティワン	2015
・ 「マインドマップ勉強法」	トニー・ブザン	アспект 2013
・ 「マインドマップが学習効果を高める要因の検証」	高橋文徳	尚綱学園研究紀要 2012
・ 「授業設計マニュアル」	稲垣忠	北大路書房 2011
・ 「iPad 教育活用7つの秘訣」	小池幸司・神谷加代	ウイネット 2013